

たじみん昼話 136

練習以上の事は試合に出ない

10月16日、恵那市榎根体育館に女子バスケットボール部のインターハイ予選の応援に行ってきた。

早く着きすぎたせいか、ききょうが到着した時は、まだ前の試合が行われていて、I先生と選手数人がオフィシャルをしていた。また、反対側コートでは、顧問のG先生が知り合いの先生と審判をしていた。



多治見高校の試合が始まるまで、2つの試合を観客席から観戦することとした。両試合とも、ダブルスコアに近い大差がついていたが、負けている方も諦めることなく頑張っていた。



劣勢チームにも、動きがしっかりした選手もいたが、明らかにスタミナ切れと思われる動きの悪い選手が多かった。コロナ禍による練習不足のせいかもしれない。

「まだ、40分も待つのか」と思ったとき、G高校チームが入ってきて目の前の席を陣取った。そして、半数の子が食事を、3人が学習を始めた。結局、多治高の試合を観戦する生徒は少数で、ほとんどの生徒が学習かお食事に没頭していた。宿題が多いのだろうか。我々の時代には、そこまで宿題はなかったと思うが。

多治見高校の試合時間がやってきた。最初の基本的な準備運動から始まり、試合の動きを想定した攻守の動きを確認する練習を念入りに行った後、シュート練習をして試合に臨んでい。対戦相手の練習は準備運動の後、ゴール前のシュート練習を念入りに行っていた。相手を想定したシュートやボール運びの練習はしていなかった。



試合直前の練習は、「試合の流れを想定したシミュレーション的な練習に重きを置くべきではないのかな」と素人の分際で勝手に心配しながら、「相手を前においた練習のあるなしの差はどう出るのか。相手のシュート練習の成果はどうか?」、に注意して観戦することにした。

スタートから、着々と得点を重ねていく我が多治高チーム。順調だ。相手を完封したまま二桁に点を載せるかと思ったら、ファールを取られ、フリースローで1点を献上した。ファールを取られがちな選手は交代してI先生の指導を受けていた。岐阜県のIH全国大会優勝チームの元主将に教えてもらえらるとは、多治高チームは幸せだ。



その後の多治高チームは、ときどき相手選手のマークを外すこともあったが、コートを上手に使って良い動きをして得点を重ねていった。

正午を過ぎたので、試合途中ではあったが昼食を取るために観戦をここで終了して、体育館を後にした。



やはり、事前練習の動きがそのまま本番の試合に良い形で出ていたと思う(もちろん日頃の練習の成果もあるが)。流石、多治高女子バスケットボール部だ。明日は、岐阜農林で試合かな。頑張ってください。

自宅の駐車場に到着した時、20PETボトルが4本あることに気が付いた。渡そうとした差入れを持ち帰るほど夢中になる、それほど良いゲームだったということだ。